

国際シンポジウム

「よみがえれアンコール・ワット、
修復はカンボジア人の手で」

— by the Cambodians, for the Cambodians 30年 —

International Symposium

Reviving Angkor Wat : The 30 years of Restoration by the Cambodians, for the Cambodians

សន្និសីទអន្តរជាតិ

ការរស់ឡើងវិញនៃប្រាសាទអង្គរវត្ត ៖

ការជួសជុលប្រាសាទខ្មែរ ដោយដៃខ្មែរ ក្នុងរយៈពេល៣០ឆ្នាំ

日本とカンボジアはこれまで65年にわたり友好親善の交流を積みあげてきた。

上智大学は1980年代から現地に入り、文化復興と平和構築を支援するため「アンコール・ワットはカンボジア人の手で保存修復」を提唱し、1991年には保存官の人材養成を開始した。1993年、カンボジア王国政府からアンコール・ワット西参道の修復要請を受け、以来遺跡の保存修復を行うカンボジア人保存官の養成を実施している。その間1996年には、現地に「上智大学アジア人材養成研究センター」を建設し、研究員の常駐により人材養成を継続してきた。

西参道の修復事業は、建築遺産を含めた文化財の修復および保存分野の国際協力事業に対する支援を目的とした国際交流基金の趣旨にも合うことから、上智大学は2015年から支援を受けてきた。

今回の国際シンポジウムは、上智大学と国際交流基金が主催し、上智大学がこれまで行ってきたアンコール・ワット西参道修復技術交流研修委員会（カンボジア委員と日本委員）を日本において実施するものである。

シンポジウムには、カンボジアから文化遺産保存・修復の最高責任者ブーン・サコナ閣下（文化芸術大臣）がカンボジア人技術交流委員会委員（保存官5名）を同道し来日、カンボジア人保存官からは活動報告がなされた。

○日 時： 2019年2月22日（金）13時～17時25分

○場 所： 上智大学国際会議場（2号館17階）

○共 催： 上智大学アジア人材養成研究センター

独立行政法人国際交流基金（アジアセンター）

○プログラム

開会挨拶 佐久間 勤（上智学院理事長／イエズス会高等教育担当理事）

櫻井友行（独立行政法人国際交流基金理事）

基調講演

「カンボジアの文化遺産を守る保存官たち」

プーン・サコナ閣下（カンボジア王国政府文化芸術大臣）

報 告

「アプサラ機構の役割とその活動」

ハン・ペウ閣下（アプサラ機構総裁）

「アンコール・ワット西参道の現場から～遺跡局長として～」

リー・ヴァンナ（アプサラ機構遺跡局長）

「技術アドバイザーの立場から」

平山善吉（アンコール・ワット西参道修復技術交流研修委員会委員長）

「アンコール・ワットの保存官としての取り組み」

マオ・ソックニー（アプサラ機構保存官）

「1996年からのアンコール・ワット西参道修復工事」

三輪 悟（アジア人材養成研究センター特任助教）

パネルディスカッション

「西参道において検証された伝統技法」

リー・ヴァンナ（アプサラ機構遺跡局長）

アン・ソピアプ（アプサラ機構保存官）

平山善吉（アンコール・ワット西参道修復技術交流研修委員会委員長）

三輪 悟（アジア人材養成研究センター特任助教）

司会：石澤良昭（アジア人材養成研究センター所長）

閉会挨拶

ウン・ラチャナ閣下（駐日カンボジア大使）

櫻井友行（独立行政法人国際交流基金理事）

カンボジア語通訳：ラオ・キム・リエン（アジア人材養成研究センター研究員）

ニム・ソテイーヴン（アジア人材養成研究センター研究員）



出席者：カンボジア・日本の技術交流委員、国際交流基金、上智大学

開会挨拶

上智学院理事長、イエズス会高等教育担当理事
佐久間 勤

国際交流基金アジアセンターと上智大学アジア人材養成研究センターが共催して、国際シンポジウム「よみがえれアンコール・ワット、修復はカンボジア人の手で」を開催するにあたり、上智大学を代表して心からの感謝を申し上げます。

カンボジア王国からご来学いただきました、カンボジア王国政府文化芸術大臣のプーン・サコナ閣下、国務長官・文化遺産総局長のブラック・ソン

ナラー閣下、世界遺産サンポー・プレイクック機構総裁のパン・ナディー閣下、アプサラ機構総裁のハン・ベウ閣下、在日カンボジア王国大使のウン・ラチャナ閣下、そしてアプサラ機構の遺跡保存官一行の皆さまには、厚く御礼を申し上げます。

上智大学は2013年に創立100周年を迎え、教育の精神として「他者のために、他者とともに生きる人 (Men and Women for Others, with Others)」の育成を掲げております。この精神をカンボジア王国で約25年にわたり実践し、活動してきた本学の海外拠点が、上智大学アジア人材養成研究センター（所長：石澤良昭教授）であります。

上智大学とカンボジアの具体的な関わりは、ヨゼフ・ピタウ元上智大学長が、1979年、「インドシナ難民に愛の手を」と、難民をたすけるため、新宿駅で大学教職員とともに募金活動を開始し、大学生らと難民キャンプを訪れ奉仕活動を行ったことからはじまりました。

他方、石澤良昭先生は、1960年に上智大学の学生研修でアンコール・ワット遺跡と初めて出会いました。以来、数多くのカンボジア人若手保存官と友好を深められたのですが、残念ながら内戦のため保存官たちが行方不明となりました。石澤先生は、カンボジア内戦中にフン・セン首相が発信した「S.O.S. アンコール・ワット」の呼び掛けに直ぐさま呼応し、1980年代、戦塵煙るカンボジア国内において保存活動を再開したのです。1991年からは日本人の先生方とともに、カンボジア人遺跡保存官と石材加工のできる石工の人材養成を開始しました。現地に寄り添い、修復工事と人材養成の拠点となる活動拠点が必要と考えた石澤先生は、東奔西走の募金活動を開始いたしました。その努力は1996年ついに現地シェムリアップ市内に現在の上智大学アジア人材養成研究センター設立として結実いたしました。同センターは、上智大学初の海外拠点であり、その大きな具体的成果の一つとして、2007年にはアンコール・ワット西参道修復工事第1工区100mをカンボジ



佐久間勤上智学院理事長による開会挨拶

ア王国政府と協力して完成させました。この工事を現場研修として手伝ったのがカンボジア人の保存官候補と石工たちでした。現在行われている西参道修復工事は、手付かずのままであった残りの100 m（第2、第3工区）であり、2020年に完成を目指しております。こうした約25年にわたるカンボジアの文化遺産の保存修復と人材養成が高く評価され、2017年8月には石澤教授の「ラモン・マグサイサイ賞」受賞として世界的に顕彰され、上智大学としても大変光栄でございました。

現在、この西参道修復工事は、この度のシンポジウムのため来日いただきました国立アプサラ機構の担当者5名の方々が現場を担当し、上智大学アンコール遺跡国際調査団の技術陣がアドバイスをいたしております。また、ユネスコの推薦する専門家（アドホック委員）からも助言を受けております。今回の国際シンポジウムでは、それらを踏まえた文化遺産の保存修復、人材養成、伝統技術と現代技術などさまざまな考察がなされると聞いております。活発な意見交換を通じて、日本とカンボジアの共同作業の成果がアジア諸国への文化貢献につながりますように期待いたします。

最後になりますが、本シンポジウムの開催にあたり格別のご支援を賜りました、国際交流基金安藤裕康理事長、同基金アジアセンターの皆さま、そしてご協賛いただきました、ANAグループ様、サタパナ銀行カンボジア様はじめ、産業界各社の皆さまのご理解とご支援に厚く御礼を申しあげます。

開会挨拶

独立行政法人国際交流基金理事
櫻井友行

国際シンポジウム「よみがえれアンコール・ワット、修復はカンボジア人の手で」が、日本国内のみならず海外からも参加を得て、盛大に開催されますことを大変うれしく思います。

カンボジア王国文化芸術大臣のプーン・サコナ閣下はじめカンボジアから来日された関係者の皆さまに対しまして心から歓迎の意を表したいと思います。また、上智大学はアンコール・ワット修復とその人材育成分野で長年渡り多大なご尽力、ご功績をあげられてきた大学であり、このシンポジウムを開催するのにまさにふさわしい場所といえるでしょう。

国際交流基金も、世界的に価値のある建築遺産を含めた文化財の修復および保存分野における国際協力事業に対し、積極的に支援を行って参りました。とくに、日本の経済力の高まりとともに、国際社会の中での日本への期待も大きくなり国際貢献が求められた1980年代後半からは継続的に協力実施してきております。カンボジアにおいても1980



国際交流基金 櫻井友行理事挨拶

年代末より、日本は和平、復興、内政安定、国造りに協力し、国際交流基金も事業を行って参りました。当時、文化の分野でも国際文化協力の重要性が高まり、同じ時期に日本はユネスコ文化遺産保存日本信託基金を創設し、アンコール遺跡の修復・保存事業を皮切りに、世界各国のさまざまな遺跡等の調査、修復、人材育成など文化協力への取り組みを本格化しました。

上智大学は、1990年代初頭にバンテアイ・クデイ遺跡の考古学発掘からアンコールでの実質的な事業を開始され、1993年よりアンコール・ワット西参道の修復事業を開始し、1996年には上智大学アジア人材養成研究センターを設立、その間にも多くのカンボジア人研究者や修復に従事する技術者の養成を継続的に実施されてきました。

一方、国際交流基金におきましても、専門家の派遣や各国の文化遺産関係者の招へいといった人物交流事業を行うようになり、1995年に設立された国際交流基金アジアセンターでは、アジア諸国における文化基盤整備への協力を活動の柱の一つと設定し、アンコール・ワット修復・保存事業につきましても、同センターを中心に支援を行いました。

その後2004年に、同アジアセンターは発展的に改組されましたが、2014年にアジア諸国との交流をさらに深めるために新たなアジアセンターが発足となり、東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年までの期限付きで、芸術・文化の双方向の交流と日本語学習支援といった事業を展開してきております。

文化遺産の保護と現代における活性化については、アジアにおける重要な課題と認識しております。有形の文化遺産のみならず、各国の伝統的な音楽、舞踊、演劇、工芸技術といった無形文化遺産は、各国、各民族のアイデンティティの拠り所として最重要視されるべきものであり、国際的な相互理解の促進に欠かせない要素であると考えます。アジアセンターは、文化遺産を守るためのオールジャパンの取り組みを推進する「文化遺産国際協力コンソーシアム」の一員として関係機関や専門家の方々と連携を深めながら事業を展開しているほか、人物交流事業や助成事業をとおして人材育成に取り組んでおります。

近年、宗教間、民族間の対立の深刻化や、自然災害などの原因により、貴重な有形、無形の文化遺産が消失の危機にさらされている例が少なくありません。他者の歴史や文化に対する理解と、寛容性を持ち、文化遺産を、人類共通の貴重な遺産として国際的に手を携えて次世代に伝えていくことが、安定した国際社会の基礎形成につながるものと、私たちは信じております。

本日のシンポジウムでは、アンコール修復事業のこれまでとこれからを考えるとともに、今後「アンコールモデル」として、他国の文化遺産の継承と活用、その人材育成への国際的取り組みはどうあるべきかを考えるためのヒントを得られると期待しております。

最後になりましたが、本シンポジウム開催にあたり、ご尽力されました石澤良昭教授をはじめとする皆さまに心から敬意を表します。

基調講演

「アンコール・ワットを守るカンボジア人保存官たち」

カンボジア王国政府文化芸術大臣

プーン・サコナ閣下



カンボジア王国政府文化芸術省 プーン・サコナ大臣閣下による基調講演

ご出席くださいました大使閣下、教授の皆さま、さらに本日ここにお集まりくださいましたすべての皆さま、ありがとうございます。私はカンボジア王国政府の文化芸術大臣で、プーン・サコナです。今回日本へご招待くださいました国際交流基金理事長の安藤裕康様、同じく上智大学の佐久間理事長様に心から御礼を申し上げます。

本日は、シンポジウムのテーマにありますように「よみがえれ、アンコール・ワット」のとおり、私たちカンボジア人の専門官と保

存官が自分たちの手で修復工事を行っておりますことを、日本の皆さまにご報告に参りました。

内戦の終結（1993年）から約25年、カンボジアの文化活動は復興いたしました。本日は私とともに2017年に新しい世界遺産に登録されましたサンボー・プレイ・クック遺跡機構の総裁、それにアンコール・ワット遺跡のアプサラ機構の総裁、さらにアンコール・ワット西参道の現場を担当しております保存官たち5名がそろって、このアンコール・ワット西参道の報告シンポジウムのために、上智大学へ参りました。

この国際シンポジウムでは、両国の専門家で構成する「アンコール・ワット西参道修復技術交流研修委員会」が中心となって推進する西参道修復工事について、両国の現場責任者が世界に向けて修復工事の現状を発表いたします。

まずは開催にあたり、25年以上に渡りアンコール・ワット西参道修復とカンボジア人専門家の養成に尽力されてきた石澤良昭先生と上智大学アンコール遺跡国際調査団の皆さまに、感謝を申し上げます。またこの西参道修復をご推進くださいました元理事長の高祖敏明先生、修復技術のアドバイザー平山善吉先生に御礼を申し上げます。この3名の日本人専門家のみなさんは昨年12月に長年の文化貢献に対して、カンボジア王国政府はその業績をたたえ勲章を授与いたしました。

私事ではありますが、私の義父はもと文化情報大臣（1981-1990）で名前を、チェン・ボンといいます。チェン・ボンは、光栄にも1997年、福岡市において、「福岡アジア文化賞」を受賞いたしました。その受賞理由は「カンボジア王国の有形・無形文化財の保存を推進する王立芸術大学を

1989年に再開し、若い専門家の指導育成に大きく貢献したこと」でした。当時の王立芸術大学では専門の講義を担当するカンボジア人教授がほとんど行方不明になっていたのです。それで調査団の先生方にはプノンペンで途中下車して大学の専門分野の授業を約10年間にわたり担当いただきました。本日のシンポジウムで発表するリー・ヴァンナ博士（アプサラ機構遺跡局長）や通訳のニム・ソテーヴン博士（アジア人材養成研究センター研究員）は、それぞれ王立芸大での受講生の一人でした。そして受講生の中から上智大学大学院に留学し、7名が博士号取得、11名が修士号を取得しました。彼らは現在、遺跡保存・修復などで大活躍をしています。

さて、カンボジアと日本は昨年友好65周年を迎えました。私たちカンボジア文化芸術省は義父のチェン・ボン大臣以来、上智大学と30年あまりにわたり、アンコール・ワットの保存・修復・研究・人材養成の活動を通じて強固な信頼関係を結んできました。両者の基本的な立場は「アンコール・ワットの協力は人と人の協力」であり、文化遺産の保存と修復の活動は、肌の色、言葉の壁を突き破り、国境のない信頼関係に立脚しています。本日の国際シンポジウムが両国の新たな一歩の積み重ねとなりますよう、活発な議論を期待いたします。

そしてこの共同修復工事が、2020年に無事完成し、本日も集まりの皆さまと再び喜びを分かちあえますよう希望いたします。皆さまには、西参道修復工事をお見守りいただくと同時に、引き続きのご理解とご協力をお願いいたします。

最後になりますが、カンボジアは文化遺産大国です。たくさんの大小の遺跡が国内にあり、例えば、プノンペンの近くには7世紀の「サンボー・プレイ・クック都城」があります。先ほど申し上げましたように、本日はその遺跡を管理、保存、修復する総裁が同席しております。とても素晴らしい遺跡です。今日の国際シンポジウム開催にあたり、ご協力くださったすべての講演者、ご参加くださいました皆さま、そして関係者の皆さまにもう一度深く感謝を申し上げます。日本の皆さまとともに、アンコール・ワットをはじめとする豊かな文化遺産を通じた両国の国際交流がより深化し、発展していくことを期待して、私の基調講演を終えます。ご清聴ありがとうございました。



サコナ大臣閣下から銀皿を拝受する石澤教授



サコナ大臣歓迎レセプション会場(写真:アプサラ機構提供)

សិក្ខាសាលាអន្តរជាតិ
អង្គររស់ឡើងវិញ ការងារជួសជុលគឺធ្វើដោយដៃខ្មែរ
- by the Cambodians, for the Cambodians, 30 years -

សុន្ទរកថាគន្លឹះ:

..អភិរក្សករណីទំនៀមទម្លាប់ដែលការពារសេចក្តីចម្រើនខ្មែរ..
លោកជំទាវ ភឿង សកុណារ រដ្ឋមន្ត្រីក្រសួងវប្បធម៌និងវិចិត្រសិល្បៈ

សូមគោរព ឯកឧត្តមឯកអគ្គរាជទូតកម្ពុជាប្រចាំប្រទេសជប៉ុន សាស្ត្រាចារ្យ លោក លោកស្រី អ្នក
នាងកញ្ញា ដែលចូលរួមសិក្ខាសាលាថ្ងៃនេះ ខ្ញុំសូមសម្តែងអំណរគុណដ៏ជ្រាលជ្រៅជាទីបំផុត ។

នាងខ្ញុំឈ្មោះ ភឿង សកុណារ រដ្ឋមន្ត្រីក្រសួងវប្បធម៌និងវិចិត្រសិល្បៈនៃព្រះរាជាណាចក្រកម្ពុជា ។
ជាបឋម នាងខ្ញុំសូមសម្តែងអំណរគុណដ៏ស្មោះអស់ពីដួងចិត្តចំពោះការអញ្ជើញរបស់លោក ហ៊ីរ៉ូយ៉ាស៊ី
អេន់ដូ (Mr. Hiroyasu Ando) ប្រធានក្រុមប្រឹក្សាភិបាលមូលនិធិអាស៊ី រួមជាមួយលោកសាស្ត្រាចារ្យ
ទ្រីតុមី សាកុម៉ា (Prof. Tsutomu Sakuma) អធិការបតីនៃស្ថាប័នអប់រំសូហ្វីយ៉ា ។

ថ្ងៃនេះ ដូចប្រធានបទនៃសិក្ខាសាលា ..អង្គររស់ឡើងវិញ ការងារជួសជុលគឺធ្វើដោយ
ដៃខ្មែរ.. ស្រាប់ នាងខ្ញុំមានកិត្តិយសសូមជម្រាបជូនលោកអ្នកទាំងអស់គ្នាដែលជាជនជាតិជប៉ុន អំពី
ការងារជួសជុលវិថីរក្សាវតីវប្បធម៌ ដែលអ្នកជំនាញនិងអភិរក្សករខ្មែរកំពុងធ្វើ ។ បន្ទាប់ពីភ្លើងសង្គ្រាម
បានរលត់(១៩៩៣)មក សកម្មភាពស្តារវប្បធម៌កម្ពុជាមានជីវិត២៥ឆ្នាំហើយ ។ ថ្ងៃនេះ រួមជាមួយនាង
ខ្ញុំ ឯកឧត្តម ផាន់ ណារឌី អគ្គនាយកអាជ្ញាធរជាតិសំបូរព្រៃគុក ដែលប្រាសាទទាំងនោះត្រូវបានចុះ
បញ្ជីបេតិកភណ្ឌពិភពលោកនៅឆ្នាំ២០១៧, ឯកឧត្តម ហង់ ពៅ អគ្គនាយកអាជ្ញាធរអប្សរា ដែល
គ្រប់គ្រងអង្គរ, ព្រមទាំងអភិរក្សករទទួលបន្ទុកជួសជុលស្ថានហាលប្រាសាទអង្គរវត្ត៥រូបទៀត បានធ្វើ
ដំណើរមកសកលវិទ្យាល័យសូហ្វីយ៉ា ដើម្បីចូលរួមសិក្ខាសាលា ជម្រាបជូនអំពីការងារនៅស្ថានហាល
ប្រាសាទអង្គរវត្ត ។

នៅក្នុងសិក្ខាសាលាអន្តរជាតិនេះ អ្នកជំនាញនៃប្រទេសទាំងពីរ ខ្មែរ-ជប៉ុន ជាសមាជិក ..គណៈ
កម្មការសិក្សានិងប្តូរបច្ចេកទេសជួសជុលស្ថានហាលប្រាសាទអង្គរវត្ត.. ដែលដើរតួជាស្នូលកណ្តាល
ជំរុញការងារជួសជុលនេះ នឹងឡើងធ្វើបទបង្ហាញជូន អំពីស្ថានភាពបច្ចុប្បន្ននៅការដ្ឋានស្ថានហាល
ប្រាសាទអង្គរវត្ត ។

ជាកិច្ចប្រកាសបើកសិក្ខាសាលានេះ ជាដំបូងខ្ញុំសូមសម្តែងអំណរគុណចំពោះលោកសាស្ត្រាចារ្យ
យ៉ូស៊ីអេគី ឃីស៊ីសាវ៉ា (Prof. Yoshiaki Ishizawa) និងគណៈប្រតិភូអន្តរជាតិសិក្សាស្រាវជ្រាវ
អង្គរនៃសកលវិទ្យាល័យសូហ្វីយ៉ា ដែលបានខ្លះខ្លែងអស់ពីកម្លាំងកាយកម្លាំងចិត្ត ជួសជុលស្ថានហាល

ប្រាសាទអង្គរវត្ត និងបានបណ្តុះបណ្តាលអ្នកជំនាញខ្មែរ អស់រយៈពេល២៥ឆ្នាំមកហើយ ។ រួមជាមួយនេះ ខ្ញុំសូមសម្តែងអំណរគុណផងដែរ ចំពោះលោកសាស្ត្រាចារ្យ **តុស៊ិកេគី កូសូ** (Prof. Toshiaki Koso) អតីតអធិការបេតិកភ័ណ្ឌប័នអប់រំសូហ្វីយ៉ា និងលោកសាស្ត្រាចារ្យ **ហ៊ិរិចគីជី ហ៊ិរាយ៉ាម៉ា** (Prof. Zenkichi Hirayama) ទីប្រឹក្សាបច្ចេកទេសជួសជុលស្ថានហាល ។ នាងខ្ញុំសូមរំលឹកផងដែរថា ដើម្បីសម្តែងសេចក្តីដឹងគុណចំពោះអ្នកជំនាញជប៉ុនបីរូបខាងលើនេះ រាជរដ្ឋាភិបាលកម្ពុជាបានប្រគល់ជូនគ្រឿងតំស្សវិយយស នៅខែធ្នូឆ្នាំទៅមុំព្រះនេះ ។

ម្យ៉ាងវិញ នេះជារឿងផ្ទាល់ខ្លួនរបស់នាងខ្ញុំទេ នាងខ្ញុំសូមជម្រាបជូនថា បិតាកេរករបស់នាងខ្ញុំក៏ជា រដ្ឋមន្ត្រីក្រសួងការបរទេសដែរ (១៩៨១-១៩៩០) ឈ្មោះ **នេង ផុន** ។ ជាកិត្តិយសដ៏ធំមួយសម្រាប់គាត់ នៅឆ្នាំ១៩៩៧ នៅទីក្រុងហ្វឹកឹអុកា (Fukuoka) គាត់បានទទួល «រង្វាន់វប្បធម៌ហ្វឹកឹអុកា» ។ មូលហេតុនៃការទទួលរង្វាន់នេះគឺការវាយតម្លៃថា «ដើម្បីជម្រុញការថែរក្សាសម្បត្តិវប្បធម៌ប៊ិចនិចអរូបីរបស់ខ្មែរឱ្យរស់រានវិញ ព្រឹទ្ធាចារ្យ **នេង ផុន** បានបើកសកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទវិចិត្រសិល្បៈឡើងវិញនៅឆ្នាំ១៩៨៩ រួមចំណែកយ៉ាងធំមួយក្នុងការបណ្តុះបណ្តាលធនធានមនុស្ស-អ្នកជំនាញស្រករក្រោយ..» ។ នាជំនាន់នោះ សាស្ត្រាចារ្យខ្មែរដែលទទួលនាទីបង្រៀនមុខវិជ្ជាជំនាញផ្សេងៗ បានត្រូវបាត់បង់ស្ទើរទាំងអស់ ។ ឃើញដូច្នោះ ក្នុងដំណើរទៅស្រាវជ្រាវនៅសៀមរាបរបស់ខ្លួន គណៈប្រតិភូសូហ្វីយ៉ាដែលមានអ្នកជំនាញវិស័យផ្សេងៗ បានចុះពាក់កណ្តាលផ្លូវនៅភ្នំពេញសិន ជួយបំប៉នចំណេះដឹងដល់យុវនិស្សិតខ្មែរទាំងនោះ អស់រយៈពេលប្រមាណ១០ឆ្នាំ ។ ថ្ងៃនេះ ឯកឧត្តម **ប្រាក់ សុឡាតារ៉ា** រដ្ឋលេខាធិការក្រសួងវប្បធម៌និងវិចិត្រសិល្បៈ ដែលអមដំណើរនាងខ្ញុំ, បណ្ឌិត **លី វណ្ណា** ប្រធាននាយកដ្ឋាននៃអាជ្ញាធរអប្សរា ដែលនឹងឡើងធ្វើបទបង្ហាញ, បណ្ឌិត **ញឹម សុនាវិន** អ្នកស្រាវជ្រាវប្រចាំមជ្ឈមណ្ឌលអាស៊ី-សូហ្វីយ៉ា ដែលជាអ្នកបកប្រែ, សុទ្ធតែជាអតីតនិស្សិតសកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទវិចិត្រសិល្បៈ ដែលធ្លាប់បានទទួលមេរៀននាកាលនោះ ។ រួចហើយ ក្នុងចំណោមនិស្សិតខ្មែរទាំងនោះ និស្សិតមួយចំនួនបានមកបំពេញវិជ្ជានៅសកលវិទ្យាល័យសូហ្វីយ៉ាជាបន្តទៀត រហូតទទួលបានសញ្ញាបត្របណ្ឌិត៧នាក់ និងអនុបណ្ឌិត១១នាក់ ។ សព្វថ្ងៃ អ្នកទាំងនេះបម្រើគ្នាទីជាអភិរក្សករ ជាអ្នកជំនាញជួសជុលប្រាសាទ ។ល។ និង ។ល។

ឯកឧត្តម លោកជំទាវ លោក លោកស្រី

ចំណងមិត្តភាពកម្ពុជា-ជប៉ុនបានឈានចូលដល់ខួប៦៥ឆ្នាំហើយ កាលពីឆ្នាំទៅមុំព្រះ ។ យើងខ្ញុំក្រសួងវប្បធម៌និងវិចិត្រសិល្បៈ គិតពីជំនាន់ព្រឹទ្ធាចារ្យ **នេង ផុន** បិតាកេរកនាងខ្ញុំមក សហប្រតិបត្តិការជាមួយសកលវិទ្យាល័យសូហ្វីយ៉ា មានរយៈពេល៣០ឆ្នាំហើយ ។ តាមរយៈសកម្មភាព ជួសជុល ថែរក្សាសិក្សាស្រាវជ្រាវ បណ្តុះបណ្តាលធនធានមនុស្ស នៅតំបន់អង្គរ ទំនុកចិត្តដ៏រឹងមាំមួយបានកើតមានឡើងរវាងស្ថាប័នយើងទាំងពីរ ។ ជំហរជាគោលការណ៍នៃស្ថាប័នទាំងពីរគឺ «សហការនៅអង្គរ គឺជាសហការរវាងមនុស្សនិងមនុស្ស», សកម្មភាពជួសជុលថែរក្សាសម្បត្តិវប្បធម៌ គឺឈរនៅលើទំនុកចិត្តគ្នាទៅវិញទៅមក កើតឡើងដោយមិនប្រាកាន់ពណ៌សម្បុរ និងដោយទម្លុះដញ្ចាំងភាសាចេញ ។ នាងខ្ញុំជឿ

ជាក់ថាសិក្ខាសាលាអន្តរជាតិថ្ងៃនេះប្រាកដជាជំរុញបន្ថែមដំណើរការថ្មីមួយទៀតសម្រាប់ប្រទេសទាំងពីរ ហើយសង្ឃឹមថានឹងមានការពិភាក្សាប្តូរចំណេះដឹងគ្នាយ៉ាងសកម្មជាពុំខាន ។

នាងខ្ញុំបួងសួងសូមឱ្យការងារជួសជុលរួមនេះ បញ្ចប់ជាស្ថាពរដោយសុវត្ថិភាពនៅពេលខាងមុខនេះ ហើយសង្ឃឹមថានឹងបានវិលកក្កើតសោមនស្ស រីករាយ អបអរសាទរ ជាមួយលោកអ្នកជាថ្មីម្តងទៀត ។ នាងខ្ញុំ សំណូមពរសុំលោកអ្នក មេត្តាបន្តការជួយជ្រោមជ្រែងការងារជួសជុលស្ថានភាពប្រាសាទអង្គរ វត្តរហូតដល់ដំណាក់កាលចុងក្រោយ ។

ជាបន្ថែម នាងខ្ញុំសូមជម្រាបជូនថា កម្ពុជាជាមហាប្រទេសវិស័យសម្បត្តិវប្បធម៌ ។ សម្បត្តិវប្បធម៌ ដោយប្រាសាទតូចធំពាសពេញផ្ទៃប្រទេស ឧទាហរណ៍ដូចជា..ទីក្រុងបុរាណសំបូរព្រៃគុក» នាសតវត្សរ៍ ទី៧ ដែលស្ថិតនៅមិនឆ្ងាយពីសៀមរាបប៉ុន្មានឡើយ ។ ដូចបានជម្រាបកាលពីដំបូងទីរួចហើយថា ថ្ងៃ នេះ អគ្គនាយកអាជ្ញាធរជាតិសំបូរព្រៃគុក ដែលគ្រប់គ្រងក្រុមប្រាសាទទាំងនោះ បានចូលរួមនៅទីនេះ ដែរ ។ គឺជាក្រុមប្រាសាទដ៏ល្អវិសេសអស្ចារ្យមួយ ។

ជាបញ្ចប់ នាងខ្ញុំសូមសម្តែងអំណរគុណយ៉ាងជ្រាលជ្រៅជាទីបំផុត ចំពោះវាគ្មិនគ្រប់រូបដែលបាន ជួយជ្រោមជ្រែង ចំពោះអស់លោកអ្នកដែលបានចូលរួម និងចំពោះអ្នករៀបចំសិក្ខាសាលានេះដែលបាន ប្រឹងប្រែងគ្រប់បែបយ៉ាង ។ រួមចំណែកជាមួយលោកអ្នកជនជាតិជប៉ុនដែលមានវត្តមាននៅទីនេះ តាម រយៈការយល់តម្លៃសម្បត្តិវប្បធម៌ គួយដូចជាអង្គវេត្តជាដើម ខ្ញុំសង្ឃឹមថាចំណងមិត្តភាពរវាងប្រទេស ទាំងពីរនឹងរឹងរឹតតែមាំមួន និងរឹងរឹតតែមានដំណើរទៅមុខទ្រទ្រង់ជាពុំខាន ។

សូមអរគុណ

